

人をつなぐ、世界をつなぐ、みんなの夢をつむぐ



寺前 拓馬

工学研究科 機械工学専攻

- 渡航国: ベトナム
- 受入企業: IHI INFRASTRUCTURE ASIA CO., LTD.
- 現地参加学生の大学: ハノイ工科大学

岡崎 祐樹

工学研究科 環境エネルギー工学専攻

- 渡航国: インドネシア
- 受入企業: PT. Cilegon Fabricators
- 現地参加学生の大学: インドネシア大学

大門 岳

工学研究科 地球総合工学専攻

- 渡航国: ミャンマー
- 受入企業: J&M Steel Solutions Co., Ltd.
- 現地参加学生の大学: ヤンゴン工科大学

カップリング・インターンシップ(CIS)対談

一企業インターンにはないCISの持ち味

岡崎: 修学旅行以外で海外に行ったのはCISが初めてやってんだけど、二人はどう？海外とか英語を使うとか、慣れてたほう？

寺前: 一度、研究室を訪問するためにヨーロッパに行ったことがある。そのとき、良い意味でも悪い意味でも、自分がグローバルの中でどれぐらいの人間なのかというのが分かった気がする。だから今回は、英語に慣れるとかそういうんじゃなく、日常的に外国語を使うのが当然という「世界の入り口」に立つことができる環境で、力試しをしてみよう、と。

大門: 僕はバックパッカーで東南アジアほぼ全制覇って感じ。けど、ミャンマーだけまだだったのと、旅行で行くのと留学で行くのでは違う経験ができるかなと思ってエントリーした。ほら、ビジネスとかインターンみたいな形なら、自分が苦手なところでもちゃんとやらなきゃアカン状況になるやん？それがいいかなと思って。

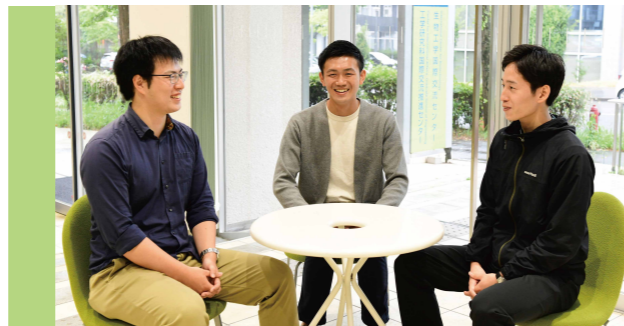
寺前: インターンといっても技術習得が目的じゃないんだよね。IIAベトナムの工場を訪ねたとき、溶接とか金属のガス切断とかやらせてもらったけど、あくまでその会社を理解する、どういう人が働いているのかを理解することに重きが置かれているんだと理解した。日本人であれ現地の方であれ、あるいは理系であれ文系であれ、それぞれどういう思いをして働いているのかを肌感覚で知り、それを課題に取り組む下地としていくのがプログラムの意図するところだと思った。

大門: 国内の事前研修で考えていた仮説と、現地で体験したことって、結構ギャップがなかった？ミャンマーの研修先はトップが日本人、スタッフは現地の人という日系企業だったので、「指示がちゃんと行き届いていないのではないかな」という予想を立てたんだけど、行ってみたら現地スタッフさんは日本語がうまくて、上からの指示がキレイに

伝達されていてビックリした。ほかにも、先進国に比べたら狭い工場に、部品や道具が散乱してて不衛生で……なんて想像していたのに、実際は清潔で危険管理もばっちり。失礼なイメージを勝手に抱いてたんだと反省したよ。

一マインドセットを変えるしかない！

大門: どの国を訪問したチームも「大阪大学・理系+文系」と「現地大学・理系+文系」の4人編成だったよね。インターンシップ先で業務をお手伝いさせてもらう中で、自分たちのテーマに対するヒントを掴み、訪問から戻った後に学生同士でああでもないこうでもないかと揉むのが楽しかったな。やりとりはすべて英語だし、ディスカッションの進め方も普段の研究室とは要領が違ってて難しかったけど、個々の意見が異なっても議論から逃げずに一つのものをつくり上げていこうという姿勢は自分でも良かったと思っている。



岡崎: 僕のチームは、現地理系の子が直前にキャンセルして、阪大文系の子まで途中で体調不良になって5日間ほど戦線離脱。それで、現地文系の女の子と2人だけになったときは完全に心が折れてしまったな(笑)

大門: 2週間のうち5日間はデカイな。

岡崎: そうなんよ。今までのグループディスカッションでやってきたことをいろいろ試したけど通用しないし、しかも部屋に男女2人だけなのはマズイって宗教上の事情も絡んできて……。なかなか議論が進まなくて、付き添いの先生に「これは無理かもしれません」って正直に相談したら「時間が解決するものじゃないから、もう岡崎君が変わるしかない」ってアドバイスされて。次の日から恥じを捨てて、英語を流ちょうに話す留学生を演じたり、冗談を言って彼女の笑いを誘ったりして必死に議論を進めたなあ。日本では聞き役に回ることが多かったのに(笑)

寺前: 自分の殻を打ち破ったんや。

岡崎: おかげで、語学力に対する不安なんか大した問題じゃないってわかった。肝心なのは、とりあえずやってみようという気持ちと伝えたいという熱意。それさえあれば、絵を描いたりパワーポイントで資料を作成したりと、いくらでもやり方はみつかった。

大門: ミャンマーチームも代わる代わる誰かが離脱したけど、僕は特別にしんどいと感じたことはなかったなあ。普段から長時間の研究に慣れているせいか、何気にメンタルもフィジカルも強かったのかも(笑)



一現場に立つことで見えてきた実情

大門: 岡崎君と僕のグループは、同じ「コミュニケーションの課題と対策」という実習テーマだったけど、訪問国が違うと課題も解決策も違うのになってすごく気になって。実際、どうだった？

岡崎: インタビューしてみえたのが、インドネシアって日本以上に上下関係が厳しいみたいでさ。部下が上司になかなかモノを言えないでいるうちにコミュニケーションがおろそかになって、モチベーションが落ちて……。その結果、生産のパフォーマンスが悪くなるっていう状況があることを発見してん。事前研修で「コミュニケーションの課題になるものって、やっぱり言語かな？」って話してたけど、もっと踏み込んだこと、たとえば「上司と部下との関係」が一番の課題じゃないかっていうところにいきついた。

大門: 僕もインタビューで生の声にハッとさせられたなあ。学生目線ではコミュニケーションに問題がないように見えたけど、トップの人は「日本人がいなくても、現地のミャンマー人だけで会社を回していけるようになるのが最終目標」と言ってるのに、ミャンマーの人たちは「上の立場に立って責任を持ちたくない」って話してて。だから、直接的なコミュニケーションの課題じゃないかもしれないけど、「主体的に動けるリーダーを育てていくようなプログラムを組む」という最終提案にまとめることにした。寺前君のチームは、「労働意欲における課題とその解決策」がテーマだったよね。

接合科学研究所主催プログラム

阪大生(文系2名、理系2名)と海外提携大学の学生(文系2名、理系2名)の各8名が、日系の製造業企業にて約2週間の日程でインターンシップを実施します。就労体験に重きが置かれた従来型のインターンシップとは異なり、世界の舞台で真のリーダーシップを発揮できる研究者、技術者、管理者の人材となるべく、「事前研修、企業実習、文化体験、最終報告会」の4行程を合宿形式で行います。言語や文化が異なる状況で、学問分野の異なる学生同士が協働を行いながら、課題解決能力やコミュニケーション能力の向上を目指す実践型の研修です。

詳細はこちら



寺前: うん、そう。「労働意欲とworking-motivationって、日本語と英語という以上の違いってあるの？」みたいなレベルから始めたんだけど、ディスカッションしていく中で、ベトナムはすごく家族を大切にしている社会だとわかったので、たとえ日系の会社であってもその点にちゃんと注意を払ってますよという姿勢を示すことが、彼らの労働意欲につながるじゃないかという話に。たとえば、PVみたいなのを社員同士で撮り合って、それを社員の家族と一緒に見るのもいいし、会社のロビーで放映するのもいいし……。調査ではインタビューとアンケートを併用したんだけど、face to faceで訊ねると「生きて家族を養うためにお金が大事」と話した人が、匿名アンケートになると「会社の発展」や「大きな会社に所属している自尊心」がモチベーションだと回答するとか、ちょっと違うことが見えてきて興味深かった。

一異文化コミュニケーションを通じて

大門: たぶん、理系って文系に比べると留学に行く人が少ないと思うけど、もったいないよね。僕は、「みんなと違う経験」をしたことで、人間として視野が広がり、土木工学系以外の会社も選択肢に入れて就職活動できたのがよかったなと思っている。

寺前: 参加します！と手を挙げたら、(主催者である)接合研の方々も渡航などの事務的な手配をしてくれるので、学生はCISの研修課題に集中できる。それに、個人留学と違って大学を通した留学だと向こうの学生と交流する機会が多いから、観光旅行のガイドブックには載っていないようなローカルで人気の食べ物屋さんを教えてもらったりして、向こうの大学生のリアルが分かってくるのもイイところ。

岡崎: 高校生までやと受け身でいても情報が集まってくるのがあったけど、大学生になったらもっと情報に貪欲になって、思わぬところに転がってる知らないことを拾っていく視点を持たないと！って、しみじみ感じる。

寺前: いろいろ不安はあるかもしれないけど、院生って自分でも気がつかないうちに課題解決能力が付いてるから、学部生の頃より心理的なストレスに強くなっていく気がする。留学先では、どこから手を付ければいいのか分からん問題を、まだコミュニケーションが浅い仲間たちと一緒にキックオフしていかなアカンことがいっぱいあった。でも議論が盛り上がってきたときに、よりリーダーシップをとれる立場になったり、よりいろんな角度から意見を出せたりしたと感じて、それは社会に出て役立つかもつかないかと。

岡崎: インターンシップを通じて、異なる言語・文化・常識が存在する環境で「相手を尊重できる人」がグローバルに活躍できるんだと強く感じた。CISは、それを体感するためには最高の機会と、その経験をさせてもらった大阪大学には本当に感謝しています。

